神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Globalization of the sport culture in Mongolia - “Sport” as the method to enter “the world” -

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-12-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 井上, 邦子, INOUE, Kuniko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2010

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

モンゴルにおけるスポーツ文化のグローバリゼーション
―〈世界〉へ参入する手法としての「スポーツ」―

井上 邦子

1. はじめに

モンゴル国というと、草原に暮らす遊牧の民というイメージを思い浮かべがちである。もちろんそうした部分も残ってはいるが、現在は国民に土地所有を促す政策[1]を行っていることもあり、年々遊牧民の人口が減り（牧畜を主な生業とする定住者も増えている）、都市部に移動し定住化が進んでいる。モンゴル国人口は現在約二九〇万人であるが、その約半数が首都ウランバートル周辺に定住している。そうした首都への人口集中によって、交通渋滞、ごみ問題、大気汚染など世界中の大都市が抱える問題を共有しているような状況である。

モンゴル国が民主化に転じてから、すでに四半世紀が経っている。インフレは年々進み[2]土地所有が進んだこともあり人々の生活は激変し、いわばグローバル経済の荒波にもまれた状態と表現してもよいだろう。こうしたモンゴルの現状を、グローバリゼーションのただ中にあるといえばよいのか、一九九〇年代に迎えた市場経済化以降のポスト・グローバリゼーションの段階にあると表現すればいいのかについては意見が様々あろう。ただ、「ポスト・グローバリゼーション」の意味が、単にグローバリゼーションの「後」という時間経過を示すだけでなく、世界のグローバル化が抱える問題を「超えていく」という志向を内包するとすれば、本論ではモンゴル国のグローバル化が抱える問題を明らかにすることで、「ポスト・グローバル化」社会を考察していきたいと考える。

現在のモンゴル社会は、世界のグローバル化の流れを受けて欧米文化に強く影響を受けているといえるが、その一つがスポーツの分野であると考えられる。もちろん、欧米で盛んな「スポーツ」（ここではバスケットボールやサッカーなどの国際スポーツ）は民主化以前でも、まったく知られていなかったわけではない。当時のソビエト連邦を通じて、いわゆる「国際的な」スポーツ文化に触れる機会も一部の国民にはあった。しかし、現在はそれとは比較にならないほどそれらの認知が進んでいる。国民の間でグローバル経済が浸透し、市場経済が根付いた現在において、スポーツ文化の視点から、モンゴル国のグローバル化の問題を取り上げることは、当該文化のポスト・グローバル化を考察する一つの方法たり得ると考えられる。

モンゴルのグローバリゼーションについての研究は、まずモリス・ロッサビによる『現代モンゴル――迷走するグローバリゼーション』[3]が挙げられる。本書は主に民主化後のモンゴル国の経済的変化とその影響下にある社会の混乱について言及されており、モンゴルのグローバリゼーションの研究をする上で貴重な研究であると考えられる。また藤田昇らによる『モンゴル草原生態系ネットワークの崩壊と再生』[4]においては、現代の日本とモンゴルの経済的な結びつきや、文化的協力関係における交流について報告がされている。

モンゴル国のスポーツ文化のグローバリゼーションについては、拙稿「身体に向かうグローバリゼーション：モンゴル国伝統スポーツの事例より」[5]がある。ここでは、主にモンゴル国の伝統スポーツである相撲が、グローバル経済が導入されたのち、稽古や試合方法がどのように変化したのかについて触れた。

ただ現在のところ、モンゴル国の「グローバル化されたスポーツ文化」の視点から考察した研究は、管見ながら見当たらない。そこで本論では、欧米発信のいわゆる国際スポーツをグローバル文化のひとつととらえ、それがモンゴル社会にどのように受け入れられているかについて現状を明らかにし、そのうえで国際スポーツがグローバル化され世界に浸透する際の問題点について考察することとする。

2．モンゴル国のグローバリゼーション

モンゴル国は、一九九〇年に複数政党制を導入したのち事実上社会主義を放棄し、その後モンゴル人民共和国から国名

写真1　モンゴル国ウランバートル市内
市街地郊外の山の上まで、定住者の家が広がっている

写真2　首都郊外に広がる「ゲル[6]地区」と呼ばれる地域
地方からでてきた遊牧民などがゲルや小屋を建てて、定住している

をモンゴル国と改め、国家の新たな制度を立ち上げた。この一九九〇年前後の時代について、アンソニー・ギデンズは「ソビエト共産主義の崩壊は、米ソ二極的対立を消滅させ、グローバリゼーションの横断的な展開を加速した」[7]と述べている。ギデンズによれば、世界のグローバル化はソビエト共産主義の崩壊により促進されたという。すなわちモンゴル国は民主化と同時にグローバリゼーションが「加速」した時期に突如掘り込まれた形となったのである。

それから四半世紀たち二十一世紀を迎えた現在、モンゴル国とその国民はグローバル経済への大きな転換期を未だ通過中であるといえるかもしれない。国際通貨基金、世界銀行、アジア開発銀行などの多国間開発銀行や援助国に誘導され、貿易の自由化や企業改革などに着手しているのが現状である。こうした「援助」や「融資」に頼っている状況が、モンゴル国のグローバリゼーションだといえなくもない。このような援助や融資を受ける条件として、モンゴル国は国民に対して土地所有法を用いて土地所有を促進させた側面がある。小長谷有紀[8]も世界銀行やアジア開発銀行が、貸しつけた資本を回収するための債権を設定する関係上、モンゴルに対して土地の私有化を進めてきた経緯を指摘している。国家よりも国際機関の論理で物事が推し進められていくのがグローバリゼーションのひとつの流れであるのなら、これはまさしくグローバリゼーションの典型といえる。伊豫谷登士翁は「グローバリゼーションという語は、海外からの諸規制に対する批判や金融に対する国際決済銀行（ＢＩＳ）の規制などによって、海外から押し付けられてきたさまざまな外圧といった場合に用いられることが多くなって」[9]きたと述べているが、モンゴル国においてグローバリゼーションはまさしく「外圧」という意味を多分に含むだろう。

このモンゴル側にとっての外圧には、これまで日本も大きく関わってきている。一九九一年にソビエト連邦が崩壊するやいなや当時のモンゴル人民共和国は社会主義を放棄しているが、その直後第一回モンゴル支援国会議が行われ、世界各国から総額一億五〇〇〇万ドルの援助が行われることが決定されている。その援助金のうち日本は五五〇〇万ドルの援助を負担したと言われている。そうして、その後毎年日本は五〇〇〇万から七〇〇〇万ドルの援助を行い、モンゴル国の最大の援助国となる。それをモンゴルの国家予算に換算すると、予算の三分の一～二分の一の額を日本が無償援助していることになる[10]。これらは、援助もしくは支援であることは間違いないが、国家予算の半分近くを他国家に依存しているのであるから換言すると日本がモンゴル国を経済的に支配しているとも言えるだろう。このようないわば「経済的支配」のことをアンソニー・ギデンズは「地球的略奪」[11]とよんでいるが、日本とモンゴル国の関係にもあてはめることも可能かもしれない。日本外務省のデータ[12]によると二〇一三年までの円借款は約八九〇億円、無償資金協力約一〇五五億円、技術協力は約四四一億円におよび、日本はモンゴル国にとって最大の援助国になっている。モリス・ロッサビも日本のモンゴル国に対する援助額の多さを指摘しており、その援助は公共バスや地方の発電施設、水提供環境の整備、工場の建設などに使用されていることを報告している[13]。

写真3　市内中心部広場に特設されたハリウッド映画に関するイベント

写真4 市内のファーストフード店
開店当日は、長蛇の列を記録した

そうした経済的なグローバリゼーションの一方で、とくに首都ウランバートルでは文化的な側面、いわゆる大衆文化のグローバリゼーションも見受けられる。たとえば、首都近郊ではすでにアメリカ合衆国、韓国、日本などのテレビ番組を衛星放送で鑑賞することが可能であり、こうした海外文化への関心は年々高まっていると感じられる。インターネットの普及もあり海外の流行歌、映画、テレビドラマの情報はいち早く入手できるし、ファッションにおいてもヨーロッパやアメリカ産の高級服ブランドが市内に店舗を構えている。さらにファーストフード店ケンタッキーフライドチキンも出店を果たし、国民の平均年収を考えると決して手軽に買えると思えない金額であるにもかかわらず、予想に反し開店当日は長蛇の列ができたといわれている。

モンゴル国においてグローバル化政策がとられるために必要であった土地所有が、そのまま定住化へと繋がり、「遊牧」という当該文化独自の生業が崩壊することになった。生業の変化が、生活世界の文化を変化させるのは当然の結果である。当地でも遊牧を基盤とする文化が一掃され、前述のような衣食住の文化や生業形態の変化によりできた余暇時間に欧米文化が一気に押し寄せる契機となったのである。

3．スポーツ文化のグローバリゼーション

一九九〇年代に入って、一気に欧米の文化を受け入れたモンゴル国にあって、スポーツ文化も欧米からの影響を強く受けつつある。スポーツメーカー（アディダス、プーマ、ナイキなど）は最近市内に店舗を構えるようになり、若者の人気

写真6　市内デパートのスポーツ用品売り場「プーマ」のシューズなどが整然と並べられている

写真5　市内中心部に新しく開店したアディダス専門店

写真8　フィットネスジムの室内

写真7　ウランバートル市内デパート内にあるフィットネスジム。入口には、筋骨たくましいヨーロッパ系の男性の写真が飾られている

を得ている。スポーツジムも市内中心部に次々に出店し、高額な入会料にもかかわらず、経営が成り立っているように見受けられる。そのひとつである市内中心地の大型デパートの最上階にあるフィットネスジムの入り口には、筋肉質の西洋系男性の写真が飾られており、「理想の身体」に関しても欧米の影響を受けていることが伺える。また近年若い女性に購読される書籍は、ダイエット関連や美容に関するものであるが、（内容は必ずしも西洋の美容法のみを扱ったものではないにも関わらず）表紙にはアングロサクソン系の女性の写真が掲載されていることも多い。そうした意味で、「理想の身体」の象徴は、西洋人の身体と重ねあわされる傾向にあると考えられる。

写真9　モンゴル相撲力士の筋力トレーニング

また、伝統スポーツであるモンゴル相撲の世界にも、グローバリゼーションの影響が考えられる。モンゴル相撲ではそもそも特別な稽古をする習慣はなかったが、相撲自体がプロ化していくと同時に、日常的に稽古を行うことが重要な位置を占めるようになった。その稽古の方法が、マシンを使用した「西洋的な」筋力トレーニングである。

また食文化においては、スポーツとセットでグローバル化がなされていく事例が見受けられる。ウランバートル市内のスポーツ中央会館は公的施設であるにもかかわらず、バスケットボールコートには「スプライト」の広告が大きく掲げられている。会館施設にはアディダスの店舗が出店しており、施設内で行われるスポーツイベントには、多くのスポンサーがその大会を支えている。筆者が調査した二〇一四年の事例でいうと、「白鳳杯」と名付けられたスポーツ大会が開催されており、そのスポンサーには外資系の旅行会社ばかりでなく、日本の飲食業（ラーメン店）などがスポンサーとして列挙されている。これもモンゴル国におけるスポーツ文化のグローバル化の象徴的な事例といえるだろう。

さらに、毎年七月に行われる「ナーダム」と呼ばれる伝統的な競技の大会[14]も例外ではない。筆者の調査によれば、二〇一二年前後に初めてナーダム会場の入り口に、コカ・コーラのイメージカラーである赤い看板が登場した。看板には「モンゴル国民のナーダムの飲み物」というキャッチフレー

ズが書かれ、現にナーダム会場の周りではコカ・コーラ社の飲み物が多く販売されている。

しかし、古くはアニミズム信仰と結びつく伝統的な競技である「ナーダム」につきものなのは、元来馬乳酒であった。馬乳酒は、馬が母乳を出す夏季にだけ作られるモンゴルの風物詩であり、人々にとって夏の楽しみでもある。その間は、馬乳酒しかほとんど口にしない老人さえいるほどであり、一年間の「毒素」を出してくれると考えられている、いわば「薬」の役割を果たすほど大切な飲み物でもある。ナーダムは毎年七月に開催されるものであるので、馬乳酒はまさしく「ナーダムの飲み物」である。相撲の試合中も取り組みが長引くと（モンゴル相撲は土俵がないこともあって、一つの取り組みが時には何時間もかかるほど長時間が特徴）[15]一端中断し、力士は馬乳酒を飲んで英気を養い、再び取り組むという場面もしばしば見受けられる。また、ナーダムのもう一つの競技、競馬においても先頭でゴールを果たした駿馬五頭は、「馬乳酒の五頭」とよばれ、ゴール後に馬乳酒を頭や体からかけてもらうことで寿がれるのである。

すなわち馬乳酒は、ナーダムが行われる夏の風物詩であるだけでなく、力士に力を与え、駿馬を寿ぐナーダムに欠かせない飲み物なのである。「モンゴル国民のナーダムの飲み物」を挙げるのであれば、すなわちそれは馬乳酒であるはずである。そうした歴史を知ってか知らずか、ナーダム会場の入り口のコカ・コーラの「モンゴル国民のナーダムの飲み物」という看板は、グローバリゼーションの「暴力」すら感じられる文言である。伝統的なスポーツ文化を通じて食のグローバ

写真10　モンゴル国立スポーツセンター内でのバスケットボールの試合
壁にもコート床面にも、スプライトの広告

写真11　ウランバートル市内のスポーツ中央会館施設内には、アディダスの店舗が出店している。さらに「白鳳杯」スポーツ大会を知らせる看板。看板下部には、スポンサー企業の名前が連なる

写真12　伝統スポーツの祭典「ナーダム」会場の入り口の「コカ・コーラ」の看板「コカ・コーラ」の下には、「モンゴル国民のナーダムの飲み物」というフレーズ

リゼーション――アメリカナイゼーションともいうが――が広がり、そもそもの伝統を侵食していくという、ひとつの事例をここでは見受けられるのである。

また、欧米産のいわゆる「国際」スポーツ熱は徐々に高まりをみせているように見受けられる。筆者の調査した限りでは、都会の若者に最も人気のあるスポーツはもはやモンゴル相撲でも競馬でもなく、サッカーとバスケットボールだという人もいる。こうした欧米のスポーツ文化が一度に広まった背景には、国民の七〇パーセントが三〇歳以下という、人口の大半を若者が占める国だという特徴が挙げられるかもしれない。国民のほとんどが競技スポーツを現役で楽しめる「若い」人々であり、それへの興味も購買意欲も急速に浸透したものと考えられる。

定住化の進むウランバートル中心部では、高層マンションの新築ラッシュが続いているが、その折のマンションの「売り」の謳い文句に、敷地内に「バスケットボールができるコートがある」というものもある。さらにここ数年で非常に人気が出てきた私立の学校でも、学校案内パンフレットには、施設の整ったバスケットボールコートなどを積極的に紹介している。こうした事例から分かることは、市場経済の浸透のもとで出現した富裕層が、ステータスや憧れを感じる象徴がバスケットボールなどのアメリカスポーツ文化であるということであるだろう。

多木浩二は「スポーツは身体のゲームにすぎないが、同時にある表象として世界を覆っているものである。これに参入することができるかどうかが、近代社会の仲間入りをしているかどうかの指標になることがある」[16]と述べている。さらに多木はアフリカによる国際スポーツへの参入を例に挙げ、ポスト・コロニアルの条件への適応をスポーツが担っているとみる。そしていわゆる「後進国」が国際スポーツ大会へ参加することは、一見ナショナリズムに見える行為だけれども「国威発揚型のナショナリズムでなく、すでに文明化した世界を中心に形成されているスポーツという身体的かつ表象的なレベルに、見かけだけでも頭を並べ、まだ近代化も達成できていない歴史に、世界の現状に適応する条件をつくることなのである」[17]という。

先に見てきたようなモンゴルの現状を鑑みると、多木が言うように「スポーツが近代社会の仲間入りをしている指標で

ある」ということをモンゴル国民が暗黙裡に受け入れているように感じられる。「すでに文明化した世界を中心に形成されているスポーツという身体的かつ表象的なレベル」に、見せ掛けだけでも頭を並べようとしているかは分からないが、少なくともモンゴル国にとって欧米発のスポーツ文化を積極的に受け入れることは、「世界の現状に適応する条件をつくること」に他ならないだろう。

モンゴル国が世界の現状への適応をスポーツにおいて成そうとしているとすれば、服装やスポーツイベントのやり方だけでなく、その技術も積極的に受け入れようとしていることは想像に難くない。実際、留学などを経たモンゴル国民が国際スポーツの技術を自国に持ち帰った例もあるだろうし、国際協力という名のもとに、他国の人間が意図的にモンゴル国に伝えた場合もある。そうした他国からの意図的な国際スポーツの伝達を「スポーツの国際交流」と言ってしまえば、平和外交という意味が強調され、奨励されるべき活動と短絡的にとらえられがちである。もっともスポーツを通しての国際交流を全面否定するつもりはないが、スポーツの国際協力であれば何の躊躇もなく積極的に推し進めるべきものという一方的な考え方には疑問を感じる。

グローバル社会においてスポーツの国際協力とはどういうものかを改めて考え、そのうえでスポーツを一方向に「意図的に」教え伝えるということはどういうことかを今一度慎重に考える必要があるのではないだろうか。次章では、モンゴル国のスポーツ文化の現状から、当該地域の「スポーツの国際協力」というグローバリゼーションについて考察したいと考える。

4．スポーツの国際協力　―映画：「モンゴル野球青春記」を手掛かりに―

ここに、モンゴル国に野球を伝えた日本人を描いた映画がある。「モンゴル野球青春記」というこの映画は、日本モンゴル国交四〇周年記念の映画でもあり、日本野球機構推薦映画でもある。原作[18]は関根淳（まこと）で、二〇〇〇年度ミズノスポーツライター最優秀賞も受賞している。

この映画および原作著書は、日本人の若者（すなわち作者の関根）が「野球が好き」という熱い気持ちだけを胸に、モンゴルで野球を教えるというノンフィクションである。野球というスポーツの存在すら知られていない一九九〇年代のモンゴル国で、当地独特の気質や習慣に戸惑いながらも、真摯に誠実に問題を乗り越えようとするストーリーとなっている。モンゴル初の野球場（これも日本の徳島県の援助で建設されたものである）でナショナルチームや少年たちに野球の面白さを伝えた、四年間のモンゴルでの「野球青春記」である。主人公は、決してモンゴル人の考え方を頭ごなしに否定したり自分の考えを強要したりすることなく、それでも野球の楽しさを伝えたいという一心で、粘り強く一つ一つのハードルを乗り越え、選手や子どもたちに寄り添った形で野球を教えていく姿に共感を呼ぶものとなっている。

この映画において、日本人にとっての野球は映画監督（武正晴）の言葉に象徴されているように感じる。武監督は「関根さん（作者）のモンゴルでの青春は僕にとっての憧れ」と

述べている。野球は、子どものころの甘酸っぱい思い出の一頁であり、それが誰しもモンゴルに抱く「草原」のイメージと重なったときには、それぞれ個々人の青春の心象風景とぴったりとマッチするのであろう。映画に登場するモンゴルの子どもたちは、日本では今や見ることができなくなった真っ黒に日焼けした元気あふれる「子どもらしい子ども」であり、その子どもたちの笑顔は、無心で白球を追いかけた純粋だったころの自分の姿と重なりあい、ノスタルジックな記憶が呼び覚まされてくるのかもしれない。現に映画のポスターは、典型的なモンゴルの草原の前で、モンゴルの「やんちゃ坊主」たちが野球のユニホームで笑っている。しかし実際は、映画の中でも、「草原で」野球をするシーンはでてこない。徳島県の有志から送られた「野球場」で野球を練習するのである。それでも、草原をバックにポスターを制作したという意図は、我々日本人が「モンゴルで野球をすること」のイメージの中に、あくまでも「草原」が組み込まれているからだろう。日本人にとってモンゴルで野球をすることの一方的な思い入れが映画のポスターは物語っている。

一方モンゴル人にとっての野球は、我々の「青春そのものである野球」イメージと、当然ながら異なってくる。野球は、近代社会に仲間入りするための指標であり、世界の現状に適応する条件をつくるものとして〈外〉の世界からやってきた、まったく新しい「何か」である。野球は、未来が見えづらい激動のモンゴル社会にあるいわば希望と夢であるということを、この映画は我々に提示してくれている。こうした「モンゴル社会にとっての野球とは何か」を、日本側の我々が丁寧に読み解くことも、本映画の重要な観点であるのではないだろうか。

映画には、モンゴルナショナルチームのモンゴル人監督が登場する。その彼は、野球経験がないばかりか野球の存在自体さえ知らないうちにナショナルチームの監督を務めているのだが、「それにもかかわらず、なぜ野球監督になろうとしたか」というエピソードが劇中で紹介される。彼は、モンゴルが民主化後急激な変化を経験した折、社会の変化に伴い、何か「新しいもの」に挑戦しなくてはならないと考え、その「新しいもの」が野球であったと述べている。彼の妻（ナショナルチームのコーチでもある）は「野球は私たちにとって〝自由の国の象徴〟なのよ」と語る。野球はモンゴルの人々にとってグローバリゼーションの象徴なのである。

このように野球を伝える側と伝えられる側には、それぞれ野球を通じて「何を感じるか」が全く異なっている。ここでわれわれが、考えなければならないのはスポーツ文化のグローバリゼーションが進む今日において、スポーツ文化を伝える側が伝えられる側の論理をどこまで考慮に入れているかという事だろう。

まず考えなければならない一つに、グローバリゼーションという名の「暴力」の問題がある。スポーツの国際協力は、確かにボランティア精神に裏打ちされた、国境を越えた結びつきを強める行為ではある。それにより互いのスポーツ交流が進めば、市民間での相互理解の一助ともなろう。しかし、スポーツ文化の伝達という行為には、複雑な問題が絡んでいるのも確かである。

先述の映画において、モンゴル人野球監督は、主人公の関根が乗り越えるべき人物として描かれている。彼はモンゴル的やり方を崩さず、旧態然とした態度をなかなかゆるめようとしない人物なのである。あるとき国際試合で、関根がルールを理解していないモンゴル人監督に忠告する場面がでてくる。その忠告に耳を貸さない監督が関根に向かって言う言葉がある。「モンゴルと日本はルールが違うんだ。それはおまえらが勝手につくったルールだろう」。モンゴル人監督にとっては、自分より「（野球チーム内での）格下」の若造に、正論を忠告されたことにプライドが傷ついたこともあり、半ば自棄を起こしてのセリフである。

しかしこの監督のセリフには、我々が考えさせられることもあるのではないだろうか。「野球の国際ルール」を「まげよう」とする監督ははたして間違いを犯しているのかということである。我々は、国際スポーツのルールを疑いの余地なく受け入れることを繰り返してきているが、国際スポーツ「後進国」の人々にとって、それは「スポーツ先進国」が勝手に決め、それを守ることを強要する、いわばルールの暴力である。これは、結局のところスポーツ文化を伝える側の「暴力」ということにもあるし、グローバリゼーションという「外圧」の「暴力」をも表すのである。欧米が中心となって勝手に定めたグローバル・スタンダードともいうべきルールは、よくよく考えてみると、それを守らなければならない理由や根拠は見当たらない。しかし一方で、それを守らなければ国際スポーツの世界から排除されてしまうことを意味する。試合にすら参加を許されないのである。こうしたルールの暴力の問題は、スポーツ場面だけに言えることではなく、グローバル社会の縮図でもある。

もう一つ考えなければならない、伝えられる側の論理がある。それは日本人が野球をモンゴル人に伝えるということの意味である。「モンゴルと言えば、モンゴル相撲が頭に浮かびますが、実はモンゴルには野球も存在します。この野球をモンゴルで広めたのが、なんと日本人だったんです」――これは、前述の映画をＰＲするＨＰの謳い文句であるが、野球が知られていない地に日本人が野球を広めるということはどういう意味があるのだろうか。

さきほどの映画にはこんなワンシーンがある。主人公の関根は、モンゴル国立大学に通う傍ら、野球を何とかこの国の人々に広めようと、同級生などにしきりに野球をしようと呼びかける。するとある学生から、バットをいつも肌身離さず持っている彼を嘲笑しながら「おまえらはどこに行ってもアメリカ人のまねばかりだな」と言われる場面がある。映画では、彼の行為がなかなかモンゴルの人々に受け入れてもらえない苦労が分かるシーンとして描かれている。

ただ、この「おまえら」はすなわち「日本人全体」を表していることは確かである。すなわち日本人がモンゴルの人々に野球を伝えるということの意味をここでは考えるべきであろう。野球誕生の地と言われるアメリカ人が各地に野球を教え伝えるのではなく、アメリカから遠く離れたアジア人（日本人）が野球を伝えるということは、別の意味があるのではないかということである。すなわち、日本人がアメリカ文化の〈正当性〉を世界に伝達していることになりはしない

かということである。その結果、スポーツの「グローバリゼーション」の強化を、意図せぬところで担っているのではないかということである。

モンゴル人にとっての野球は、「自由の国の象徴」（映画の中では監督の妻のセリフ）だとして映画ではとらえられていると先ほど述べた。急激な民主化で先が見えなくなっているこの国で、野球はいわば「希望」であり「夢」でもある。映画では、ひと時モンゴルで社会問題になっていた「マンホールチルドレン」が野球に参加することで、明日への希望をつなぐ感動的シーンも出てくる。家も両親も失った孤児が、仲間と野球をすることで、自分の力では如何ともしがたい困難な現状を乗り越えられる力として描かれている。また原作著書では、国際試合のためにアメリカ合衆国へ遠征したモンゴル人選手が、そのまま逃亡しアメリカに移住してしまった現状も記されている。このような事例は言うまでもなく、モンゴル人にとって野球は「自由」への切符であり手段なのである。

ここで筆者が指摘したいのは、モンゴル国民にとっての「夢」や「希望」が、日本人によって強化された「アメリカ的自由」に単純に書き換えられる危険性である。当時ＪＩＣＡ理事長であった緒方貞子は、途上国援助についてこう語っている。途上国援助は、現場に近いところにいるほど何が必要かわかるものであり、地域ごとの問題をきっちりと把握して、相手の国の人たちとよく交わりながら需要を掘り出してほしい――[19]。モンゴル国にとって困難な現状を乗り越えるための「夢」や「希望」は、どうあるべきなのか。それは、欧米主導でルールや組織が整えられている「国際スポーツ」を広めることであっていいのかどうかは、熟考を必要とする。モンゴルの人々にとって「スポーツ」とは何なのか。どのような身体観をもとにスポーツを行い、どのような世界観や信仰を背景に伝承してきているのか。そうした「現場を見て」国際協力を行うこと、スポーツの交流を行うことが肝要であろう。何の配慮もなしに野球人口をただ増やせばいい、ただ広めればいいのだということになれば、外圧を意味するグローバリゼーションの強化を担うことになりかねないことを、「伝える側」が意識すべきである。

5．おわりに

モンゴル国は一九九〇年代に入り、民主化されると、グローバル社会の大きな波にのまれ、遊牧の生業は崩れ定住化が進むことになった。土地所有法によって、国民一人ひとりに土地が配布されると、ますます定住化が進み、グローバル経済が広がることなり、国民生活は大きく変化することになった。

その結果、人々の生活そのものもグローバル化されることになったが、その一つとして、スポーツ文化も変化することになった。欧米のスポーツメーカーの商品が市内に出回り、国民の伝統行事にも、欧米の飲料品がスポンサーになる状況がある。また伝統スポーツに代わり、欧米のスポーツに人気が移っていくという現状もある。

そうした現状のモンゴル国において本論では、モンゴル国に欧米産のスポーツが広がり、スポーツ文化のグローバル化

がなされるときに起こる問題を取り上げた。その具体的な事例として、映画「モンゴル野球青春記」を事例にして、スポーツのグローバリゼーションについて考察を行った。

その結果、野球をモンゴル国で伝えるということは、伝える側と伝えられる側に思い入れの齟齬があることを指摘した。伝える側の我々は、野球をどこか遠き良き青春のノスタルジーと重ねあわせ、いつしか美しい物語へと昇華させる。それが、スポーツを通じての「国際支援」を支えるモチベーションともなる。

一方で、新しい欧米のスポーツ文化（すなわち国際スポーツ）である野球を伝えられるモンゴル国民側はどうだろうか。野球は、彼らにとって激動の時代、激変の社会を何とか生き延びるための希望であり、「自由」への切符である。ただ、その「自由」への切符が、グローバリゼーションの世界が設定する「自由」でしかないということも十分考えられる。それが真にモンゴルの人々に必要な「自由」の切符であるかどうかは、再考するべきである。もしかすると我々は、そのグローバリゼーションの「強化」に知らず知らずのうちに加担し、グローバル化された「自由」と、モンゴルの人々が本当に必要としている「希望」を単純にすり替えるという、大きな罪を犯しているということにもなりかねない。伝える側が、ナイーブな善意からかかわってきているだけに、返って十分考慮するべきであると考えられる。

【注および引用・参考文献】

(1) 二〇〇四年に施行された土地所有法は、占有権のみならず土地の可処分権が法律で認められた。これにより一家族につき〇・〇七ヘクタールが無償で分配されることになり、定住化が進められることになった。さらに、二〇〇八年には、土地を取得できる権利をもつ主体が「家族」から「個人」に限定され、土地所有の主体が個人へと移行した。

(2) 近年のインフレ率は一〇パーセント台で推移している。二〇一五年一月時点でインフレ率一一パーセント（前年は一二・五パーセント）である（在モンゴル日本大使館「モンゴル週報」二〇一五年一月一二日―一八日版、二〇一五年二月九日発行より）。

(3) モリス・ロッサビ著、小長谷有紀監訳、小林志歩訳『現代モンゴル――迷走するグローバリゼーション』明石書房、二〇〇七年

(4) 藤田昇、加藤聡史、草野栄一、幸田良介編著『モンゴル草原生態系ネットワークの崩壊と再生』京都大学学術出版会、二〇一三年

(5) 拙稿「身体に向かうグローバリゼーション―モンゴル国伝統スポーツの事例より」、『神戸市立外国語大学研究年報』50、

(6) 神戸市外国語大学外国学研究所、二〇一三年、二五～三三頁
(7) モンゴル国の移動式住居のこと。
アンソニー・ギデンズ著、佐和隆光訳『暴走する世界―グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社、二〇〇一年、三五～三六頁
(8) ＮＨＫ教育テレビ「視点・論点」（二〇〇二年一〇月一一日放送）の中で、「モンゴルとグローバリゼーション」について小長谷有紀が語っている。
(9) 伊豫谷登士翁『グローバリゼーションとは何か――液状化する世界を読み解く』、平凡社新書、二〇〇二年、五〇頁
(10) 佐々木健悦『検証・民主化モンゴルの現実』、社会評論社、二〇一三年
(11) 前掲(7)三八頁
(12) 外務省ＨＰ（http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/data.html）二〇一五年五月一六日閲覧。
(13) 前掲(3)、二四七～二四八頁
(14) 毎年、首都ウランバートルでは七月一一・一二日に行われるナーダムと呼ばれるモンゴル国の伝統スポーツの競技会。相撲、競馬、弓射が行われる。
(15) 現在はルールが変更され、時間短縮化の方向に向かっている。
(16) 多木浩二『スポーツを考える――身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書、一九九五年、一七九頁
(17) 前掲(16)、一八一頁
(18) 原作は、関根淳『モンゴル野球青春記』（二〇〇〇年発刊の太田出版および二〇一三年帆風社がある）。なお本論では、帆風社の二〇一三年度版を参照した。
(19) 二〇〇三年十二月二一日朝日新聞（朝刊、一五頁）の「国連の再生と日本の国際援助　ＪＩＣＡ理事長・緒方貞子氏に聞く」の記事より。

※なお、本研究は平成二十四年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究Ｃ課題番号二四五〇〇七四二）の研究成果の一部である。

Globalization of the sport culture in Mongolia - “Sport” as the method to enter “the world” -

INOUE Kuniko

The state of Mongolia, democratized in the 1990s, was affected by the globalization, thus the nomadism collapsed, and was going ahead through the domiciliation. When land was distributed to citizen by the law of landholding, the domiciliation progressed more and more. And the global economy changes the lifestyle of the people dramatically, and the sport culture of Mongolia changes itself, too. The product of the European and American sporting goods company was sold in the city, and, a European and American drink products have sponsored the traditional event of the nation. In addition, international sports are more popular than traditional sports nowadays.

This article mentions that there are some problems in Mongolia when international sports spread through State of Mongolia. I discussed the globalization of sport with a movie “*Mongoru yakyu Seisyunki*(description of Mongolian baseball youth)” as an example.

Discussing the case, it became clear that there are some differences in attachment for playing baseball between the side to convey baseball and the conveyed side in State of Mongolia. We, Japanese compare the story to the nostalgia of good old days. It becomes the foundation of “the international support” through sports. On the other hand, the Mongolia nation compare the playing baseball to the ticket of getting “freedom”. But it may be that “freedom” is defined by the world of the globalization. We should reconsider it whether it is “freedom” that Mongolian people need truly.